



## アメリカ現代文学の修辭的戦略について

Keywords: トマス・ピンチョン、デヴィッド・フォスター・ウォレス、文学理論、現代文学

## ● 研究概要

アメリカで活躍する現代作家を中心とした文学研究をしています。特に、1960年代以降に登場した、とても風変わりな難解な作家たちの作品に注目しています。



所属 教養・基礎教育部門

特任講師

玉井 潤野

Tamai Junya

## ● 研究テーマ

・文学作品に描かれた弱者たちの姿

アメリカ現代文学を代表するトマス・ピンチョンおよびデヴィッド・フォスター・ウォレスの作品では、しばしば弱者(女性、子どもなど)がグロテスクな怪物のような姿で描かれる。こうした修辭的戦略の政治的な意味や効果を解明する。

・アメリカ現代文学の歴史的変化

ピンチョンがデビューした1960年代は、アメリカとソビエト連邦という二つの超大国が対立しあい、全面的核戦争の恐怖が切実に感じられた冷戦の時代だった。ピンチョンの初期作品はこうした時代の影響を色濃く残している。一方でピンチョンの作風は、冷戦構造が崩壊した90年代以降に大きく変化した。とくに、子どもを中心とした「家庭」、子どもを産み育てる「母親」といったテーマがピンチョン文学において存在感を増した。デヴィッド・フォスター・ウォレスはそんなピンチョンとは対照的に、あくまでも孤独な、他者との関係を築くことのできない人物たちを描き続けた。異なる世代の彼らを比較することで、第二次世界大戦以後の米国文学の課題の一端が浮き彫りになると考えられる。

・文学理論

デヴィッド・フォスター・ウォレスは、文学理論、とくに脱構築に強い関心を示していたことで知られている。ウォレスのみならず、アメリカにおいて一時期熱心に受容されたジャック・デリダやポール・ド・マンによる「脱構築」は、アメリカ現代文学を語るうえで欠かせない。脱構築の理論が実際に創作された小説にどのような影響を及ぼしたのかを探求する

## ● 論文・著書等

## 【論文】

1. “Reconciliatory Maternity: Resistance to Violence in Thomas Pynchon’s *Bleeding Edge*”, *The Journal of the American Literature Society of Japan*. 2019, No. 18, p19-36.
2. “Enraged Fathers: The Critique of Patriarchy in Thomas Pynchon’s *Against the Day*”. *Kansai American Literature*. 2019, Vol.57, p5-18.

## 【著書】

1. 共著『テキストと戯れる——アメリカ文学をどう読むか』松籟社, 2021年, 担当部分p85-110.